様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　６ 月 ２３ 日現在

機関番号：３４６０２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2020
課題番号：１８Ｋ００１９８

研究課題名（和文）チェコ・アヴァンギャルドのブックデザインに関する総合的研究

研究課題名（英文）A Comprehensive Study of Czech Avant-garde Book Design

研究代表者
大平　陽一（Ohira, Yoihi）

天理大学・国際学部・教授

研究者番号：２０１６９０５６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,900,000円

研究成果の概要（和文）：　チェコ・アヴァンギャルドの遺産のなかで、国際的に認知度が高く、評価されている分野は、今やブックデザインであるといっても過言ではない。アヴァンギャルド文学の書籍は、アヴァンギャルド美術の依り代ともなり、構成主義、機能主義、シュルレアリスムなどの芸術潮流を反映していた。
　それ故、従来のほとんどの研究は、それらの〈イズム〉と関連づけつつ、美術史の観点から行われてきた。本研究においては、情報デザインの先駆者ストナルや、地方で活動したロスマンのような、従来の研究では等閑視されがちであった画家ではないプロフェッショナルなデザイナーたちをチェコ・ブックデザインの歴史の中に正当に位置づけることを目指した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
チェコ・アヴァンギャルドの装本に関する従来の研究では「アヴァンギャルド」の側に力点が置かれ、シュルレアリスムと構成主義を対比しつつ、もっぱら美術史的観点から論じられてきたため、プロフェッショナルなデザイナーの仕事が等閑視されがちであった。
　本研究においては、芸術界において周辺的な存在であった彼らデザイナーの手になる機能主義的な装本を、戦間期アヴァンギャルド芸術と関連づけつつ、デザイン史のなかに正当に位置づけることを試みた。
　こうした試みは、チェコ・デザインの人気が高い日本においても前例がなく、愛好者たちの間にチェコ文化へのより広い関心を惹起することが期待できるだろう。

研究成果の概要（英文）：It is no exaggeration to say that book design is the most internationally recognized and acclaimed area of the Czech avant-garde heritage. Books of avant-garde literature were, at the same time, media of avant-garde art, and reflected international and metropolitan artistic trends such as constructivism, functionalism, and surrealism. Therefore, almost all the research on Czech avant-garde book design has been conducted from the perspective of art history, in relation to those “isms.” They tend to neglect the professional designers such as L.Sutnar, a pioneer of information design, and Z.Rossmann, who was not active in Prague, but in Brno. We felt it more proper to position them in the history of Czech book design, rather than in Czech art history.

研究分野：ブックデザイン

キーワード：ブックデザイン　アヴァンギャルド芸術　機能主義　構成主義

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

もともと十月革命後から第二次世界大戦までの時期のロシアの芸術文化を研究していた筆者は、同時期のロシアならびにチェコの書籍・雑誌を収集するうちに、建築の理論家、美術評論家ならびに文芸評論家としてチェコ・アヴァンギャルドを理論面で主導したカレル・タイゲを知り、深い関心を抱くに至った。

まず注目したのは、理論家としてのタイゲにおける〈シュルレアリスム〉的なる原理と〈構成主義〉的なる原理との共存――すなわち互いに矛盾対立する非合理的なアヴァンギャルドの潮流と合理的なアヴァンギャルドの潮流との弁証法的とも言える共存――について論じるうちに、タイゲにおける――ひいてはチェコ・アヴァンギャルドにおける種々の〈イズム〉の共存であった。その理論的言説から浮かび上がってくる著者像は、脱領域的な多才さが災いしたといえば言い過ぎになろうが、それにしても、いつもその時々の複数のイズムに引き裂かれながら、それらのジンテーゼを目指して悪戦苦闘する理論家としての姿であった。

だが、タイゲの本を収集するうち、そうした理論家としてのタイゲ像が、実は理論的言説よりも、その評論活動のかたわらで唯一実作者として手がけた装本に瞭然とあらわれていることに気づき、強く惹かれるようになった。タイゲのブックデザインは、それ自体として魅力的で、美術史的に興味深いのはもちろんだが、その作風の多様性と変化が彼自身の理論における種々のイズムの輻輳、そうした多元性を孕んだ理論体系が変容を遂げていく有様のイラストレーションとなっており、タイゲによる装丁本という実例に即してタイゲの芸術理論における――ひいてはチェコ・アヴァンギャルドの芸術理論、建築理論における――種々のイズムの布置を歴史的に辿ることができることに一驚を喫した。

そこで芸術・建築理論との関係に注目しながら、ブックデザインにおける作風の変化を辿る作業を始めたが、最初に注目したのは、筆者の元々の関心対象であったロシア構成主義との関係であった。このような、いささか偏った研究態度を選択したのは、筆者自身の関心に近く、事実関係に比較的明るかったという理由もあったが、それまでタイゲの装本を論じてきたチェコ本国の美術史家の側にも偏りがあるように、Russophobia、Francomania からロシア構成主義の影響を低く見積もる傾向が認められるように思われたからでもあった。シュルレアリスム的なブックデザインの中にも構成主義的要素が共存しているという事実を指摘することには、それなりに意義はあったと自負するものの、しかし、フランス起源のシュルレアリスム的なるものやドイツのバウハウスに近い機能主義的なるものについて知識を深めなければ、戦間期チェコ・アヴァンギャルドのブックデザインの全体像を捉えることはできないのもまた、否定しがたい事実であった。

２．研究の目的

戦間期チェコ・アヴァンギャルドの遺産のなかで国際的に認知度が高く、評価の高い分野であるブックデザインの全体像を、美術史的だけでなくデザイン史の観点も取り入れバランス良く、複眼的に描き出すことである。

３．研究の方法

数多くの装本を手がけ、絵画・文学・建築などの諸分野にまたがるチェコ・アヴァンギャルドが辿った歴史を反映し、プリミティヴィズムからポエティスム、構成主義、機能主義、シュルレアリスムに至る多様な作風のデザインを残したカレル・タイゲの理論と実践を参照項にしつつ、シュティルスキーやトイェンのようなチェコ・シュルレアリスムの画家たちのブックデザインとプロフェッショナルなデザイナーであるラジスラフ・ストナルやズデニェク・ロスマンのバウハウス的、機能主義的なグラフィックデザインの双方を、戦間期チェコの装本文化のなかに位置づけることを試みる。

４．研究成果

当初の目論見と違って、シュルレアリストのブックデザインに関する先行研究は、そのほとんどが表紙は挿絵を絵画作品との関係を美術史的観点から論じたものばかりで、独自のジャンルとしてのブックデザインという観点に立つ論考はなかった。たとえばトイェンは、よしんば建前であろうとも旧来のタブロー画を否定し、映画や写真に関心を寄せたアヴァンギャルディストとは思えないことに、創作対象は絵画だけであり、収集家の間で「トイェンのデザイン」とされている書籍の多くがデザイナーとの共作であり、トイェンは表紙絵や挿絵を提供するに過ぎず、タイポグラフィなどはタイゲやストナルに任せているのであり、極論すれば、「トイェンのブックデザイン」は撞着語法なのである。

これに対して、シュティルスキーが 1920 年代に試みた「絵画詩」――方形を中心とした幾何学的な平面分割を基盤に、そのグリッドにはめ込むようにして写真や地図、絵葉書、文字などが自由な連想に従ってモンタージュされたコラージュ――には、ダダ的、シュルレアリスム的な感性と構成主義的な幾何学性が共存していた。その後のシュティルスキーのデザインした表紙にも、トイェンとは異なり、構成主義的なグリッドの使用やサンセリフ体の題辞など〈ニュー・タイポグラフィ〉的な特徴を示す作例が散見される。その反面、表紙や挿絵のドローイングや写真には、構成主義とは相容れないシュルレアリスト的感性が顕著であり、独自の作風が生み出されているし、構成主義的な要素を含まないブックデザインもあり、美術史

家はこれらの作品を高く評価する傾向がある。題辞に筆記体の手書き文字を使用することに、機能的なるもの、構成主義的なるものの否定以外の意味を見いだすことは難しい。シュルレアリスム的装本の典型とされながらも、絵画詩の場合と同様、そこに構成主義的な基盤を見いだせる、1930 年代後半のタイゲのデザインと比較すると、シュティルスキーによる怪盗ファントマのシリーズ（チェコ語訳）の表紙こそは、純粋にチェコ・シュルレアリスム的デザインとする向きもあるが、この覆面盗賊を主人公にした大衆小説が、既成概念の否定の体現者として多くのシュルレアリストたちを熱狂させたのが事実であるにしても、あえて強調された毒々しいまでの通俗性のゆえに、シュティルスキーの表紙デザインは一致した評価を得られていない。

このように、シュルレアリスム的装本についての考察は、遺憾ながら、確たる結論に到達することなく、具体的な成果を残せなかったのに対し、機能主義的装本に関する研究は一定の成果をあげることができた。

チェコ・アヴァンギャルドのブックデザインに関する論考は少なくないが、従来の研究においてはもっぱら「アヴァンギャルド」の側に力点が置かれ、シュルレアリスムと構成主義の比較対照の中で美術史的観点から論じられてきた。その結果、ストナルやロトマンのような、芸術界にとって周辺的な応用美術の専門家、プロフェッショナルなデザイナーの仕事は等閑視されがちであった。一連の研究において、筆者は戦間期チェコの機能主義デザインに正当な評価を与え、アヴァンギャルドの歴史、デザインの歴史に位置づけることを試みた。

そこでまず、機能主義に立脚して大きな成果を残したプラハ言語学サークルにおける〈機能〉の概念に、とりわけ同サークルのメンバーであった美学者ムカジョフスキーと民族誌学者ボガトゥィリョフの理論的著作における〈機能〉の用法に着目して分析することにより、広い意味での機能主義を戦間期チェコの文化的コンテクストの中に位置づけることを試みた。その結果、デザインにおける機能主義がともすれば、唯一無二の実用的機能しか想定していないのに対して、プラハ学派の言語論、詩論、芸術論、フォークロア研究においては、人間活動には複数の機能が共存しているという認識を再確認することを通じて、情報伝達機能だけを強調し、美的機能を無視する単一機能主義が誤りであり、実際、情報伝達に特化されているはずのカタログ・デザインや展示デザインにおいてさえ美的機能への配慮が必須である、とストナルが考えたいたことを、その著書の中に確認できた。

次に、戦間期チェコにおける機能主義を代表するデザイナーでありながら、画家ではなくデザイナーであるが故に美術史家たちが正面切って論じることのなかったストナルのデザイン思想を、戦後、移住先のニューヨークで著わされた商業カタログ論の精読を通じて解明せんと試みた。アメリカ時代にストナルが手がけた工業用カタログや売場のデザインは、今になって情報デザインの先駆的業績と高く評価されるようになったが、それらの仕事は全て、戦間期チェコにおけるブックデザインや展示デザイン、プロダクトデザインに遡ることが明らかにされたのみならず、機能主義デザインの典型と見なされてきたストナルのデザインが、実用的機能だけではなく、アヴァンギャルド芸術への深い関心と共感に裏打ちされた美的機能にも配慮されたものであることが、カタログ論の精読から明らかになった。アヴァンギャルディストたちからは部外者として扱われ、美術史家たちからはブックデザインの分野における脇役と見なされてきたストナルにデザイン史における正当な位置づけのみならず、アヴァンギャルド芸術との関係の再考を迫るものである。

このように、デザインにおける機能主義を単一の実用的機能だけに配慮したものでなく、機能の複数性を前提とするものと考えることは、タイゲのブックデザインにおけるさまざまな〈イズム〉の共存を矛盾対立と見なす理解の仕方の見直しをも迫るものであり、機能主義の再検討がもたらし気づきに基づき、新たな観点からタイゲの装本の実像を明らかにするため、写真家守屋友樹氏の撮影した書影を多く含む報告書『カレル・タイゲのブックデザイン』を、私家版として近日中に刊行する予定である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計5件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 大平陽一	４．巻 72
２．論文標題 情報デザインとアヴァンギャルド芸術の狭間で：ラジスラフ・ストナルのデザイン	５．発行年 2020年
３．雑誌名 天理大学学報	６．最初と最後の頁 59-87
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 大平陽一	４．巻 23
２．論文標題 ラジスラフ・ストナルのデザイン論についての覚書	５．発行年 2020年
３．雑誌名 スラヴ学論集	６．最初と最後の頁 81－111
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 大平陽一	４．巻 67
２．論文標題 プラハ言語学サークルにおける機能の概念	５．発行年 2020年
３．雑誌名 スラヴ研究	６．最初と最後の頁 83-114
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 大平陽一	４．巻 1
２．論文標題 戦間期プラハの文学結社〈庵〉とアリフレト・ベーム	５．発行年 2019年
３．雑誌名 科学研究費助成事業報告集『ルースキイ・ミール ー 文化共生のダイナミクス ー』	６．最初と最後の頁 131-166
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 大平 陽一	４．巻 1
２．論文標題 プラハ国民劇場のロシア人ダンサー：亡命ロシア文化と芸術家の同化	５．発行年 2019年
３．雑誌名 科学研究費助成事業報告集『ルースキイ・ミール ー 文化共生のダイナミクス ー』	６．最初と最後の頁 167-190
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計0件

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関